Map20 奄美群島の環境文化 生きものから季節を感じる　空

環境文化　生きものから季節を感じる

奄美群島は、亜熱帯地域にあり、本州と同じような四季があるわけではありませんが、鳥や蝶の渡りや花の開花、川や海の生きものの行動などに、奄美群島ならではの季節の移ろいを感じることができます。自然の恵みから糧を得るくらしが色濃く残されている奄美群島では、こうした生きものたちの活動を目安に、今でも狩猟採集や祭事が行われていたり、言い伝えが残されていたりします。それらひとつひとつが、奄美群島の自然を活用する知恵であり、自然と人々が深く結びついた奄美群島の独自の環境文化と言えます。

こうした環境文化は、伝統的な生活様式が失われるにつれ近年急速に失われつつあります。さらに、以前は身近だった生きものでも、急速に減少し絶滅の危機にあるものも多くなっています。例えば、秋の七草は、季節の植物を愛でる日本の文化ですが、フジバカマやキキョウは絶滅危惧種に指定され、生育地も激減しています。もし、これらの植物が見られなくなれば、秋の七草を愛でる文化も失われてしまうかもしれません。生きものを守り生物多様性を守ることは文化を守ることにつながっており、文化を守ることが、生きものや生物多様性を守ることにもつながっています。

サシバやアカハラダカの渡りに「秋」を感じる

夏の南風が北東から吹く涼しい風に変わるころ、奄美群島にはサシバやアカハラダカが飛来します。

奄美群島では、サシバの声で人々は秋の訪れを知ります。それは同時に、川や海の恵みを得るための目印にもなっています。

- ミーニシ（新北風：秋のはじめに吹く北東の季節風）が吹けば、サシバがやってくる
- サシバが鳴くころガン（カニ）が川から海におりてくる
- 「ピーちばヒュー」（サシバがピーと鳴くころ、ヒュー（シイラ）がたくさん獲れる）

アカハラダカは、数千羽の大きな群れをつくって渡りをし、奄美群島に秋の訪れを告げる鳥です。サシバよりも数週間早い時期に渡ってきます。

- 上昇気流が発生する晴れた朝に、集団が上空を旋回する鷹柱（たかばしら）がみられる

サシバ

サシバは、日本の本州などには夏鳥として繁殖のために渡来し、秋には越冬のため南に渡っていく中型の猛禽類です。繁殖地は中国大陸の北東部、朝鮮半島、日本（本州～九州本土）で、越冬地は奄美群島を含む南西諸島、中国南部、東南アジアです。日本では、谷戸や谷津と呼ばれる水田、畑、樹林などが入混じる環境を好み、里山を代表する種と言われています。

日本で繁殖するサシバの秋の渡りについて、長年の観察調査や標識調査などからそのルートが明らかになってきました。東北以南で繁殖を終えたサシバは、９月半ば頃になると南下をはじめ、大きな群れとなります。本州・四国・九州に沿って移動し、一部の個体は奄美群島を含む琉球列島や台湾で越冬し、一部はさらに南下します。奄美群島には９月～１０月ころ渡来します。なわばりを主張するため、樹木や電柱にとまったり、飛びながら、よく通る声で「ピックィー」と鳴きます。

アカハラダカ

アカハラダカも秋の渡りで、九州から南西諸島に渡来する猛禽類です。中国の東部や朝鮮半島で繁殖し、中国南部や東南アジアで越冬します。秋の渡りの際に、九州や南西諸島を通過するほか、本州でもまれに観察されることがあります。

なお、サシバやアカハラダカは、春になると越冬地から北の繁殖地へ向かって渡りをしますが、そのルートはまだ解明されていません。

［出典］・渡りルート　森岡 照明・叶内拓哉・川田 隆・山形則男　「図鑑 日本のワシタカ類」　文一総合出版(1995)
・伝承　わきゃあまみ 16　奄美群島の生きものカレンダー（制作：奄美自然体験活動推進協議会・環境省奄美野生生物保護センター）
・伝承　奄美群島の残したいもの伝えたいもの　12集落の宝もの（発行：奄美群島広域事務組合）
・背景図　地理院タイル（標準地図）